A Study of Joseph Conrad

"Nostromo"

Toshihiko UEKI

J. Conrad は "Nostromo" を起点として従来の作品とは違った問題に作家としての意識を向けたと言っても過言ではないだろう．"Nostromo" 以前の作品では，Conrad は社会から遊離した，閉された世界に住む人間に試練を与え，人間が閉された世界に置かれているが故に環境に対して，また自己の内なるものに対してより純粋に反応する過程を描いてきた．しかし Conrad は "Nostromo" において，政治と孤独，社会的な騒乱と個人の荒廃に彼の眼を向けている．さらに "Lord Jim" で扱った dream の中にある ego-ideal, illusion の問題，idea と action の関係，そして destructive-element の問題をより深く掘り下げ，社会を，政治をそして fanatic な人間を，その人間の行動の動機を深遠な懐疑主義の眼で分析し，また彼が生涯追求して止まなかった個人的な罪の意識と，自己懲罰といった多くの問題を描いている．そして "Nostromo" は彼の後の作品 "Under Western Eyes", "The Secret Agent" の基盤ともなっているのである．この "Nostromo" から，彼の作品は "Lord Jim" に代表されるような impressionistic method を用いることなく action, facts を中心に描かれるため，今迄の "intension novel" から離れていくという点にも注意すべきであろう．

(I)

"Nostromo" の politics の問題は "Nostromo" を初めとして "Under Western Eyes", "The Secret Agent" といったいわゆる彼の政治小説といわれる作品の基盤となるものである．現存する社会，そして歴史は民衆により，あるいは民衆の指導者のより高い政治意識によって織りなされるものと考えられがちであるが，Conrad は社会を，歴史をそうした眼でもって眺めるのではなく，想像もつかぬ個人的な夢，幻影，気まぐれそして愚行，あるいは可能な経済的動行によって織りなされるものとして眺めている．次にこの点を考察してみよう．

革命政府の名のもとに Sulaco に侵入した Sotillo や Montero の大義名分の裏に隠されている彼等の真の意図は，民衆に平和，秩序を与えることではなく，彼等の個人的繁栄であり，真の革命家としての愛国心も素質も皆無であり，革命の名を利用している偽善者にすぎぬ．彼等は社会の指導的立場にありながら個人的欲求を満すために彼等の属している秩序ある社会を，信頼を寄せている人々を裏切り，革命宣言でもって彼等の動機を包みかくし，あたかも正しい動機に基づいているかのように見せかけている卑劣漢なのである．Gamacho、Fuentes そして Don Juste Lopez などは，より「強い力」に服従する日和見主義的立場に立って動き，実質のともなわぬ形式だけにこだわっている．我々はこうした社会を指導する人々が社会を裏切り，逆に人々に

盗族と恐れられている Hernandez や，インディアンと共に裸で馬に乗り布教に勤める Father Corbelán, Don Pépé などの所謂 wild な人間の中に社会に対して，自分の仕事に対して実に忠実な人々を見出すのである．また Don José Avellanos は革命の結果よりも，革命そのものに，革命文の作成に彼の全ての情熱を，Holroyd は革命そのもの以上に商業的動機に，Gould に対する性格的興味に基づいて Costaguana と関係している．しかし彼等によって変動する Costaguana 社会の歴史的概念は人間の理性を「力」として認めることもなければ，事件の理論的連続性をも否定しているのである．Conrad は政治とは実質のともなわぬ形式主義，権力の争奪，そして狂信と見做し，そうしたものを原因として展開される事件を一つの現象の連続として把握し，何らかの理論的法則性をもその中に見出していない．Gould は何十年と同じことを繰り返している Costaguana の革命の歴史に対して次のように語っている．

The words one knows so well have a nightmarish meaning in this country. Liberty, democracy, patriotism, government—all of them have a flavour of folly and murder. Haven't they, doctor?[1)]

事実，Costaguana の社会では "Liberty", "democracy", "patriotism" といった言葉は，決して新しいものに向う旗手的な言葉ではなく，日常誰の口からも発せられる深い意味をも，重要性をももたぬ言葉なのである．Costaguana の人々の口から発せられるそうした言葉は鳥カゴの中のオウムの発する "Vive Costaguana!" とちっとも変わるところのない言葉である．Costaguana の人々は今迄に何度も口にされたそうした言葉の意味を理解せず，言葉の響きに酔っているにすぎない．従って革命的行動の本質にも動機にも無関心であるため，平和を憧れつつ，いつもその期待を裏切られている．そして新しく起こった革命的行動の結果に関心を示しているのは Aristocratic な人々だけである．我々はこのような印象を Don Jasé Avellanos によって書かれた "History of Fifty Years of Misrule" の印刷物が風に吹かれて飛び散る光景の中に強く感じるのである．Costaguana においては民衆を支配する Aristocratic な人々も目まぐるしく変わる情勢の中で支配することに疲れ果て，民衆も平和と秩序がもたらされるのを待つことに疲れ果てている．

ともあれ社会は個人的動機に基づいて変動しつつあるが，個人の意志，個人的動機を超越して，自らの内に変転する要素を，現存する機構を変革する要素を含んでいる一つの living organization なのである．社会の運動は，活動に加わる人々を置き去りにしたままに，前進するのである．しかし大切なことは今迄に Costaguana に起こった革命と次に起ころうとしている革命の質的な相異である．今迄の革命の中心人物 (Decoud, Sotillo, Montero, Guzman Bento, Don José Avellanos) は概して Aristocratic な人々であり，その革命行動は「個人的利益」，「物質的利益」あるいは「特定階級の利益」を狙った傾向が強い故に真の革命とは呼びがたいものである．しかし次に起ころうとしている革命の中心は Father Corbelán, Antonia, native そして immigrant がその中心になろうとしている．彼等は "material interests" を頼りとしない proletariat なのである．

"We have worked for them; we have made them, there material interests of the

foreigners",[2]

"Let them beware, then lest the people, prevented from their aspirations, should rise and claim their share of the wealth and their share of power",[3]

"And do you know where they go for strength, for the necessary force? To the secret societies amongst immigrants and natives, where Nostromo—I should say Captain Fidanza—is the great man".[4] このことは "material interests" の上に平和と秩序が建設されるという Gould の ideal な観念を根底から崩すものであり，同時に，現代人である我々が "material interests" はすべてのものに勝ると考えている唯物主義に対する Conrad の痛烈な批判であると思われる．

"Nostromo" の前半では決して見られなかった proletariat の政治意識が最終段階において芽生えている．ここに同じ革命的行動の中にも大きな差異が生じている．Conrad が Arirtocratic な人々の支配する社会から Proletariat の支配する社会へと，社会が必然的に変わっていくことを暗に示唆しているかどうかは疑問であるが，proletariat の民衆が政治意識に目覚め，革命の中心となって活動を開始する過程は Costaguana の住民の symbol であり，個人的には政治に対して，いかなる意見も，概念も持っていなかった Nostromo の行動，思考の変化の中に我々は見出すことが出来ると思う．

What he had heard Giorgio Viola say once was very true. Kings, ministers, aristocrats, the rich in general, kept the people in poverty and subjection; they kept them as they kept dogs, to fight and hunt for their service.[5]

Which (i.e. San Tomé mine) appeared to him hateful and immense, lording it by its vast wealth over the valour, the toil, the fidelity of the poor, over war and peace, over the labours of the town, the sea, and the Campo.[6]

The rich lived on wealth stolen from the people, but he had taken from the rich nothing—nothing that was not lost to them already by their folly and their betrayal.[7]

しかし Conrad は社会が Aristocrato の支配から proletariat の支配に移ること以上に，社会を構成している上，下層の人々がより高い政治意識を養うことが，個人的欲望を達成する手段として革命を利用する個人的英雄主義を阻止すると同時に，己の恐怖心を正当化し形式だけを重んじ，権力に屈服する無能力な日和見主義的政治指導者の出現を阻止することにもなると主張しているのではあるまいか？　そして「物質的利益」を追求する機械文明はかつての人間相互の信頼を崩し，一種の anarchism を生み出すものとして恐れているのではないだろうか？

"There is no peace and no rest in the development of material interests. They have their law, and their justice. But it is founded on expediency, and is inhuman; it is without rectitude, without the continuity and the force that can be found only in a moral principle.[8]

She saw the San Tomé mountain hanging over the Campo, over the whole land, feared, hated, wealthy; more soulless than any tyrant, more pitiless and autocratic than the worst Government; ready to crush innumerable lives in the expansion of its greatness.[9]

このような政治的保守主義な見解や，政治意識の高揚は他国の支配を受け，分割され苦悩する Poland を見捨てた Conrad の革命に対する意見であり，祖国を捨てたことに対する彼の自己弁護であるかも知れない．すなわち彼は革命的な政治運動は現存する全ての様式を破壊し，新しい様式を生み出すが，政治に関係する人々は狭量な狂信者であり，専制主義的な偽善者であり，彼等にとって都合のよい様式を生み出すために破壊活動を展開し，善良な民衆をその過程において犠牲者とし その上に 彼等の繁栄を築いていると見ている．こうした彼の態度は 現代社会は彼が最も重要視した人間相互の信頼を崩し，倫理的規範だけでは現代社会は生きられぬといった彼の恐怖心に因を発しているのではないか？ 彼は "Nostromo" において社会の前進する姿を描くより，むしろ彼の好む「保守的」な世界へと後退させている．しかし政治意識の高揚を待っているだけでは決して社会は発展しない．Conrad の言うように革命は必ず進歩を意味するものでもなければ，建設的でないかも知れないが，混頓とした社会情勢の中にあって，良きにつけ悪しきにつけ，革命は民衆に 社会を意識させ，現状を打破し，新しい社会に 第一歩を踏み出すという点にその意義を認めなくてはならない．Conrad の理性は fanaticism に知的な嫌悪感を示し，Avellanos や，Sotillo のような 愚行に 走らせることもなければ，彼の父や Poland の若者達のように革命の嵐の中でその生命を失わせることもなかったが，逆に祖国を救い，進歩させる積極的な役割を演じさせもしなかった．しかし彼は「祖国を捨てた」という罪の意識は終生感じていたのであろう．彼は "Some reminiscence" の中で次のように語っている．

I understood no more than the people who called upon me to explain myself. There was no precedent. I verily believe mine was the only case of a boy my nationality and antecedents taking a, so to speak, standing jump out of his racial surroundings and associations.[10]

Conrad はこの意識を Decoud の中に表現している．Decoud の fanaticism, sentimentalim に対する 知的な 嘲笑，そして Father Corbelán の言葉に 対する 応答は Conrad 自身の心情，Poland に対する祖国愛の発露ではないか？ 彼は自分に出来なかったことを Decoud にさせているのではないだろうか？

"Another revolution, of course. On my word of honour. Mrs. Gould, I believe I am a true *hijo del pays*, a true son of the country, whatever Father Corbelán may say. And I'm not so much of an unbeliever as not to have faith in my own ideas, in my own remedies, in my own desires."[11]

Conrad は政治を 懐疑の目で眺め，中立な立場というより，むしろ 政治に 嫌悪感を 示してはいるが，懐疑の世界に 己を 絶対的に 投入することも出来ず "Nostromo" においては思索的人間 Decoud の活動に死を与えることによって不安定な状態のままに終わっている．

Conrad は革命とは社会制度を根底から覆し，指導者を追放することであるかのように考えられているが，社会制度，因襲の撤廃が人間の精神を，感情を根底から変えるものであるか？ 肝心なことは破壊することなく 現存する 組織をより 良い方向に改革，改良していくことではないか？ と我々に問いかけているのだろう．この解釈は非常に保守的であるかも知れないが，保守的であるということは決して後退を意味するのではなく，現状を破壊することなく維持し，保護

する点において，やはり進歩を意味していると思われる．"Nostromo" はそういう意味において，政治が "material intererts" に取りつかれ virtue を無くした唯物的人間に左右されていることを指摘し，我々の政治意識と相互信頼の欠除に対して警告をしているのではないだろうか？

(II)

Dream の問題は "Nostromo" だけでなく "Lord Jim" においても取り扱われている．"Lord Jim" においては思索的人間である Jim の ideal な夢を論理的に取扱ったが "Nostromo" において，Conrad は行動を中心として dream を取扱った点に注意すべきである．彼は "Nostromo" の中で次のように語っている．

Action is consolatory. It is the enemy of thought and the friend of flattering illusions. Only in the conduct of our action can we find the sense of mastery over the Fates.[12]

我々は Conrad が action に我々の救いがあると語っているように想像するが，彼の考え方は彼の種々の作品を見る時，色々に解釈出来る．"Lord Jim" において Stein は次のように語っている．

A man that is born falls into a dream like a man who falls into the sea. If he tries to crimb out into the air as inexperienced people endeavour to do, he drowns—*nicht war*? …No! I tell you! The way is to the destructive element submit yourself, and with the exertions of your hands and feet in the water make the deep, deep sea keep you up. So if you ask me—how to live?[13]

"A man that is born falls into a dream like a man who falls into the sea" の文章から判断すれば，dream は sea と考えられる．また destructive element も sea と考えられる．従って我々は「人は生涯，自分の夢を追うべきだ」と Stein の忠告を解釈することが出来る．しかし Jim のように ideal な dream を破られた男に夢を追えということは無駄である．もし我々が sea を dream と考えずに "this world" と考えるなら上の文は「生を受ける者はこの世に生まれ落ちるように夢に取り付かれる」と解釈される，すると destructive element は reality と考えることが出来る．また sea よりも軽い air は dream と考えられる．sea が reality あるいは destructive element と考えるのは道理にかなった推測と思われる．[14] この解釈に基づくなら，Stein の忠告は「人は達成出来ぬ夢を追うことなく，reality に自らをゆだねて生きていく」ようにといっているように考えられる．しかし Nostromo 以上に ego-ideal に取りつかれた imaginative な Jim に現実に即して生きるように忠告することは無理なことである．従って Stein の忠告は別な視点から解釈されなくてはならない．もし我々が dream, sea, air という語を他の語と equate させず destructive element の一つと考えるならば，別の解釈が下せると思う．すなわち destructive element は destruction そのものではなく destruction へと導くすべての要素と考える時，destructive element は現実であれ，夢であれ，ego-ideal，また action であっても不思議ではない．Stein は要は現実に即して行動しようが，ego-ideal を，illusion を

追い求めて生きようが，個人の選択の自由にまかされていると言っているのではないだろうか？ Conrad は "Nostromo" で次のように語っている．

In our activity alone do we find the sustaining illusion of an independent existence as against the whole scheme of things of which we form a helpless part.[15)]

我々は Conrad は思考よりも行動に価値を見出しているように考えるが決してそうではない．何故なら action そのものは決して恒久的な救いでないことは誰もが知っていることである．Conrad は彼の essay, "Autocracy and War," の中で「我々は行動している時，運命を支配しているという幻影を感じるのだが，行動とは我々の不安な虚栄心を満足させ，未来につきものの恐怖感を和らげるにすぎぬ」と書いている．唯，人間は行動している時のみ自分を "good enough" と考えているだけなのである．従って Conrad は行動が思考に優るとは考えていないが，彼が行動を高く評価したのは彼が思索的人間であり，祖国の苦難な時期に積極的に行動しなかったことを常に意識していた為であろう．また彼は "The Nigger of the Narcissuss" の中で "They had been strong, as those are strong who know neither doubt nor hopes" と語り，あたかも感性が堕落の原因でもあるかのように見做している．確かに初期の Conrad の作品に現われる "Typhoon" の Mac Whirr 船長や，"The Nigger of the Narcissuss" の Singleton のような忍耐と忠誠においては誰にも負けぬ，仕事感に満ちあふれた人々の中には精神的荒廃も，恐怖もなく，真に救われているような印象を受けるが，彼等と同族である Captain Mitchell は "Nostromo" の中では現実を看破する力を持たぬ「愚か者」としてしか目に映らない．すなわち現実の社会にあっては忠誠も，忍耐も，仕事感も人間の救いとならないのである．また行動的な人間，Nostromo ですら恒久的な救いなく死んだではないか？ 従って我々は行動はの中にも，思考にも satisfactory な死を求めることが出来ないままに satisfactory な死を求めて生きているのである．多分 Conrad はこうした真実を知っている上で，なお夢によって自らを観念的に正当化する必要性を，個人とそしてその行動に他人からの同意を得るためにある倫理的意義を付与しようと考えていたのではないだろうか？ すなわち，dream, illusion, idea は人間の行為に期待と正当性を与える本人の気付かぬ "a true lie" なのである．換言すれば，我々は生命の糧として如何にうまく自分自身に対し，この "a true lie" を信じ込ませるかが問題なのである．ある意味で人間はこの "a true lie" に全存在をかけているのではないだろうか？

ここで "a true lie" を "Nostromo" の登場人物にあてはめて考えて見る時，Nostromo, Decoud は自己の内に宿している性格的欠陥の故に破滅している．Gould の "ideal conception" の中には倫理的な歪みがあることに我々は気付く．同じ "ideal conception" であっても Dr. Monygham の "ideal conception" は彼の適切な feeling を多分に誇張したところはあるが，決して倫理的歪みを宿したものではない．従って Gould の "ideal conception" には過度な自己確信が含まれており，それが無意識な self-deception の要素として彼の内に存在している．だが self-deception の要素を自らの内に宿していない Dr. Monygham ですら "self destructive element" を宿していることは彼の仲間を裏切った事実から明らかである．いずれにせよ人間は永続的な救いのな

いままに destructive element に身を委ね，瞬間的な行動，必然的な感情の流れの中に救いを見出して生きなくてはならない．ここに未来に期待せずして生きるという Conrad の一種変わった哲学があるように思われる．何故なら Conrad は行動と思考のいずれも次の文章において完全に救いのないものとして否定しているのだから．

A victim of the disillusioned weariness which is the retribution meted out to intellectual audacity, the brilliant Don Martin Decoud, weighted by the bars of San Tomé silver, disappeared without a trace, swallowed up in the immence indiffrence of things.[16]

The maginficent Capataz de Cargadors, victim of the disenchanted vanity which is the reward of audacious action,…[17]

(Ⅲ)

Nostromo にとって人生の価値は，Holroyd, Sotillo, Montero 達にとって経済的価値が最大のものであるように，社会の人間から彼に与えられる賞賛の言葉の中に，そして社会の人々の彼に対する尊敬に満ちた態度の中に見出されるのである．彼にとって金銭は社会の人々に気前よく与えることによって reputation を得る一手段に過ぎぬものである．彼のこうした態度は，その意識の対象こそ異なってはいるが，Jim が dream を，ego-ideal を実現するために燃やしたあの狂気の情熱と一致するものである．Jim が思索的人間として観念的に自己を理想化し，その illusion を追い求めたのに対し，Nostromo は行動的人間として行動の上に自己を理想化し，reputation を追い求めた人間である．

Jim は個人的な dream を実現する過程において，文明社会から隔離された非文明的な Patusan の土民に，平和と秩序をもたらし，自分の内に Patusan の支配者という意識を多分に持っている．彼は実に社会的人間でありながら，文明社会から反社会的人間の烙印を押された人間である．一方 Nostromo の行動も個人的 reputation の追求ではあるが，彼の行動に対する動機は実に非社会的でありながら，その行為は Jim の場合よりもはるかに大きな社会に対する社会的人間の行動として我々の眼に映る．彼の行動が非常に個人的動機に基づくものであろうと，また極端な egoistic なものであろうと，彼の生活と彼の社会的環境を振返ってみる時，彼の意識は常に社会の人々を意識して動いているのである．そしてまた，社会の人々から彼に与えられる賞賛の言葉もまた社会的なものなのである．しかし社会から与えられる賞賛は Nostromo の生活に対する物理的，あるいは経済的保証ではない．従って彼の生活は確固たる基盤の上に築かれているものでもない．彼には娘 Linda の夫に彼を選んだ Senôra Teresa の言葉

"You never change, indeed," she said, bitterly. "Always thinking of yourself and taking your pay out in fine words from those who care nothing for you."[18]

の意味は理解されていない．自らの reputation と自己確信に満ちた優越感の幻影に養われている Nostromo の虚栄心は，自らを反省することなく，虚栄を維持しなければならぬ過程において，次第に孤独な存在へと追い込まれている．そして反省することを知らぬ Nostromo に対する Martin Decoud の言葉 "He (i.e. Nostromo) does not seem to make any difference between

speaking and tkinking" は Nostromo の未来に暗い影を投げかける暗示的な言葉として我々の心の中に一沫の不安な感情を渦巻かせる.

"incorruptible," "a man of thousand" と言われた Nostromo の精神的荒廃の原因は, Costaguanu の住民を救うべく彼の大胆な行為や, 銀の輸送そのものに因を発しているのではなく, 彼に "on your head" という言葉でもって銀の輸送を依頼した人々にとって, 銀は単に Sotillo や Montero の手に渡ることなく, 彼等の革命運動の経済的基盤が失われさえすればよいというものであり, その後はいくらでも San Tomé mine から銀は産出されるのだという安易な考え方が Nostromo の仕事感に対する誇りを傷つけ, 彼に彼の行動を反省させたのである. 反省することを知らぬ人間が反省する時, 彼は全く無力になってしまうのである. すなわち Nostromo の銀の輸送に対する観念的な意味付けと, 実際の結果そして Aristocratic な人々の銀の輸送に対する解釈の相異の中に彼の精神的荒廃の最大の destructive-element が存在していると考えられる.

Aristocratic な人々は Nostromo に賞賛の言葉を与えることによって, 彼を彼等にとって有能な雑役夫として利用しているのに過ぎない. そして Nostromo に不可能と思える仕事を科したのみならず, 彼から reputation を奪い, 生命を危険にさらしたのである. この段階に至って初めて Senôra Teresa の言葉が彼に意識されたことだろう.

"They have been paying you with words. your folly shall betray you into poverty, misery, starvation. The very leperos shall laugh at you—the great Capataz."[19]

Aristocratic な人々の彼に対する評価は彼の自己評価を完全に覆すものであり, 同時に Aristocratic な人々の proletariat な人々に対する扱い方でもある. 従って "I am betrayed" という Nostromo の言葉は単に彼自身の事柄のみならず, proletariat 全体を指していると推測される.

もはや reputation に頼って生きることが出来なくなり, 人間不信に陥ち入った Nostromo にとって, 銀は reputation を得る一手段から, かつての名声と同じく, 彼が生きていくための最大の関心事, 彼の存在の総てとなっている. というのは彼の自己確信に満ちた世界が崩れ出した時, それに替わる silver の魅力が Nostromo を捕えたと言える. 彼は銀の魅力に取りつかれた時, 自ら盗人としての罪を認めることによって, 銀に対して盗人の所有権を獲得するが, かつて reputation が彼の生命の糧であったように盗人となった Nostromo にとって, 今では銀がその生命の糧となっている以上銀の所有権を手離すことは彼の死を意味するものである. しかし silver は Nostromo に "銀を盗む" という罪の意識だけではなく, Decoud を死に追いやった罪の意識, Senôra Teresa の臨終の際に牧師を迎えにいかなかったという罪の意識を含んでいるのである. 言うなれば silver は "Nostromo" の中では destructive element の象徴として解釈されるべきものである.

彼の egoism の挫折と, reputation の消滅が Nostromo に同階級の人々との社会的連体意識の必要性を目覚めさせ, 同階級の人々のために生きることを考えさせた時, 彼の罪の意識が彼を彼の属する社会に溶け込めぬ人間に変えていく過程は "Under Western Eyes" や "Lord Jim" でも扱われている Conrad の最も得意とする問題であろう. 物理的関係において社会とつながり

つつ，精神的に社会から遊離した Nostromo の姿には，自信，誇りが感じられないばかりか，かつての彼の面影すら見えない．臨終の床にあって，"The silver was killed me" と Mrs. Gould に語る Nostromo の言葉は，単に狙撃された事実を指すのみならず，銀による彼の精神的荒廃を，勇気の消失を，平安な心の崩壊を意味しているものと考えられる．

Costaguana は Charles Gould にとって native country ではなく，彼の父の生命を奪った mine そのものに挑戦する「場」以外のなにものでもない．しかし彼は Martin Decoud の言うように，彼の行動のすべてに "idea of justice" を与えることなくして行動することの出来ぬ Idealist なのである．

"Simply that he cannot act or exist without idealizing every simple feeling, desire, or achievement. He could not believe his own motives if he did not make them first a part of some fairly tale."[20]

それ故，彼は mine に次のような観念を与えている．

"Only let the material interests once get a firm footing, and they are bound to impose the conditions on which alone they can continue to exist. That's how your money-making is justified here in the face of lawlessness and disorder. It is justified because the security which it demands must be shared with an oppressed people. A better justice will come afterwards[21]

彼の言葉から判断すれば，mine は飽くまで Costaguana に平和と秩序をもたらす一手段である．言うなれば，mine は平和と秩序に従属すべきものである．

しかし Gould の mine の再開に対する動機の中には ideal な観念だけではなく，彼自身にも分からぬ動機が混入している．すなわち，彼は ideal な観念に基づいて行動しているだけではなく，Nostromo が reputatin に，Decoud が skepticism に，Don José Avellanos が革命的情熱に，Old Viola が Garibaldi に対する忠誠に動かされたのと同様，彼も mine そのものに情熱を注いでいるのである．Gould は彼の行為に justice な動機づけをしているが，その裏にあるものは，無意識ではあるが，Satillo, Montero あるいは Guzman Bento 等と同じく個人的動機に基づいている．何故なら彼は mine に ideal な観念を与えながら，あらゆる政治的な理論を軽蔑し，Costaguana の人々とはかけ離れ，彼の住む Sulaco の町の平和の維持よりも mine の存続をより強く願っている．我々は彼の態度，話し方，教養といった点で彼は Costaguana 人でありながらもはや Costaguana 人でないという印象を受ける．彼は，idealist ではあるが，真に Costaguana の平和を望んでいるのでもなく，またその革命的動乱にも無関心であり，唯 Sulaco を彼の仕事場としているだけである．それ故彼は外部から彼の仕事場への侵入を防ぐために，mine を要塞の如く防備し，Costagnana の中の一つの特殊な領域にまで発展させ，別個な排他的な社会を形成している．しかし政治的イデオロギーは非政治的な人間の上にも影響を及ぼすものである．あらゆる Government は San Tomé mine を狙い，逆に Gould は mine の存続を認めるあらゆる Government を買収する．従って Costaguana の平和と秩序は，Gould の理論とは逆に mine に従属している．ここに彼の "idea of justice" は歪んだ形をとって現われている．Gould は彼の妻のような理知的な Idealist ではなく，"Heart of Darkness" の Kurz

や "An Outcast" の Lingard と類似した passion にかられている人間である.

Gould の個性と，置かれた環境に対する献身と，Holroyd を後援者として，彼は conqueror として Sulaco の町に君臨しているが mine の産物である silver は彼にとって目的を推行する過程に生ずる副産物であり目的をもたぬ結果なのである.[22] 従って silver は彼自身にとっていかなる価値も持っていないばかりか，彼の仕事に対する倫理観の歪曲の象徴であり，彼と妻との間の愛の破滅をそして彼自身の破滅をもたらす destructive-element である. 理知的な Mrs. Gould は silver の持つ悪魔的な力をそして Gould の彼女からの精神的分離を看破している.

Mrs. Gould's mission is to save him from the effects of that cold and overmastering passion, which she dreads more than if it were an infatuation for another woman.[23]

そして Decoud もまた，Gould の中にある insane な要素を見出している.

A man haunted by a fixed idea is insane. He is dangerous even if that idea is an idea of justice; for may be not bring the heaven down pitilessly upon a loved head?[24]

Gould は mine を平和，秩序をもたらす手段とする段階から mine を彼自身の仕事と見る段階へそして最後には彼自身と mine を同一化する段階へと進んでいる.

He was like a man who had ventured on a precipitous path with no room to turn, where the only chance of safety is to press forward.[25]

従って彼は mine を狙う者に対して飽くまで戦い mine を無傷のままで保護するか，あるいは mine を他人に手渡すことは彼の自己放棄となるため，自らの手でもって mine を完全に破壊するか二者択一の道が残されているのみである. 彼がダイナマイトを常に用意している態度には保守主義者と破壊主義者の奇妙な感情が同居しているのである. 彼の前途は Mrs. Gould と共に "precipitous pass" を馬の背に揺られて歩く姿の中に予測されるものであり，その道は Kurz が ivory によってその精神を蝕まれた如く，Jim が ego-ideal に魅せられ自己破滅へと進んでいった如く，彼の精神的荒廃へと向っていることは容易に推測されるのである. この彼の精神的荒廃は彼が Mrs. Gould との間の愛情を無視し，"material interests" の一片である "silver mine" を love 以上のものであると信じ，彼の鉱山に対する意識的動機と半意識的動機との差異に気付かず，mine を再開したいという彼の衝動に対する人間的弱さの為に彼自身の理想を裏切り，自己欺瞞に陥ち入った点に因を発していると思われる.

非文明的な Costaguana を離れヨーロッパ社会の中で生活している "boulevorsd" の Decoud は自ら人生の傍観者，懐疑主義者であると自称している. 人間の中にある "an honest, almost sacred conviction" が人間をかりたて愚行へと追いやっていくのを傍観し，その行動を嘲笑することが彼の人生の楽しみであり，同時に生命の糧なのである. この懐疑主義者 Decoud の理知的な態度は，ヨーロッパでの遊学の結果だけではなく，彼の native country に繰広げられる "farce-comic" な熱狂的政治活動の中に，期待すべきものもなく，また自らを投げ入れることの出来なかった彼の理知的な悲しみの反動ではないだろうか？ 彼の態度は Jim そして "Victory" の Heyst 等に共通して見られる非常に思索的な人間であり，Conrad の小説の主人公の典型的なタイプである. しかし Conrad は行動力をともなわぬ論理的人間を賞賛するよりむしろ非難の調

子でもって描写している．

この懐疑主義者，理性以外のいかなる virtue も認めない Decoud が Costaguana の "farce-comic" な政治活動に身を投じた理由として，愛する Antonia を得るためであり，他のいかなる動機でもないと執拗に主張している．

he seized every opportunity to tell her that though she had managed to make a Blanco journalist of him, he was no patriot. First of all, the word had no sense for cultured minds, to whom the narrowness of every belief is odious; and secondly, in connection with the everlasting troubles of this unhappy country it was hopelessly besmirched; it had been cry of dark barbarism, the cloak of lawlessness, of crime, of rapacity, of simple thieving.[26]

彼も Gould と同じく彼の行動に何らかの動機付けをしているが，自己欺瞞を最も嫌った彼の理知的，嘲笑的性格は彼の native country に対する純粋な衝動を欺いているのである．

He was moved in spite of himself by that note of passion and sorrorw unknown on the more refined stage of European politics.[27]

この彼の衝動の中に我々は Conrad 自身の感情と衝動によって和らげられた懐疑主義を見るのである．彼は自分のことを 'Neither the son of his country nor of any other' と言っているが，Decoud こそ Antonia, Don José Avellanos に優るとも劣らぬ愛国者であり，彼の銀の輸送の計画は，多分に Aristocratic な要素を含んではいるが，Satillo, Montero, あるいは他の者達の大義名分の裏に隠された個人的利益に基づくものではなく，真に愛国心に基づいたものである．彼は革命を利用し，国土を荒し，物質的利益を得ている者は Costaguaua の住民以外の者であり，常に革命の犠牲者となるのが住民であることを鋭く看破している．

"Those men came to take it. Now the whole land is like a treasure-house and all there people are breaking into it, whilst we are cutting each other's throats. The only thing that keeps them out is mutual jealousy. ……
It has always been the same. We are a wonderful people, but it has always been our fate to be,—he did not say "robbed", but odded, after a pause—"exploited!"[28]

従って革命への彼の参加は，この鋭い洞察力でもって革命を嘲笑しつつも，彼の目の前で展開される "farce-comic" な動乱の中で彼と同階級の人々が犠牲者となることに堪えられなかった自称人生の傍観者 Decoud の愛国心のあがきではなかっただろうか？

Decoud の深い懐疑主義は彼の精神的態度の産物であると言える．そしてその個性なるものは illusion であり，それは個人の生命にとって，必要不可決な susteining illusion なのである．自らの illusion あるいは dream を信ずることによって人間はその生命を燃やすことが出来るというこの Conrad の考え方は彼の最初の作品 "Almayer's Folly" から彼の作家としての生涯を通してみられる特徴である．

他方，Dr. Monygham の懐疑主義は Decoud のそれとは違って彼の経験に基づくものである．

when fallen into disgrace and thrown into prison by Guzman Bento at the time of the

so-called Great Conspiracy, he had betrayed some of his best friends amongst the conspirators[29)]

彼の懐疑主義は自己に対する裏切り行為にその源を発しているのであり，Jim と同じく，彼には罪の意識がある．自己を，仲間を裏切った罪の意識が彼をして，一般の社会人としての行為に暗い影を投げ，自ら society の一員であることを拒否している．彼の非常に見苦しい服装，目立たぬ立居振舞はこの意識の反映である．彼が拷問の経験から学びとったことは，苦痛の前には，名誉も，真実も，自尊心も，いかなる価値も存在しないということである．それ故自分の願望を満すためには，人間が堪えうることの出来る屈辱は底なしの沼と同じであると彼は信じている．従って彼は revolution の名のもとにおこなわれる reform も，所詮個人の欲求を満たす手段として眺めているだけで決して信用しているのではない．彼は自らにも，他人に対しても faith を失くした男なのである．この彼の経験的敗北による faith の消失と罪の意識は "There is nothing I cannot face" という自らの標語を打ち破られ，罪の意識を持ち，faith を，community-obligation を回復しようとした Jim の態度と非常によく似ている．Jim が chance の到来を待ちわび，彼の ego-ideal にその生命を投げ出したのと同じく，Dr. Monygham も Mrs. Gould の彼に対する同情の中に，彼の Mrs. Gould に対する同情の中に一種の変形された passion の救いを見出しているように思われる．Conrad はこの faith と，community-obligation の問題を "Under Western Eyes" でも取り上げているので再考を要すると思われる．

懐疑主義者 Decoud にしろ，Dr. Monygham にしろ，自分の行為の実体を信ずること，また自分に対する そして 他人に対する信念は 個人の存在理由の根本源理と考えられる．この信念がない限り個人は無に帰するものと考えられる．ところが，この『信念』は ideal な reason 以上に，多分に sentimental なものを含んだ reason である．この事実を Decoud は revolution に，mine に取り付かれている人間の中に見出している．

Their sentiment was necessay to the very life of my plan; the sentimentalism of the people that will never do anything for the sake of their passionate desire, unless it comes to them clothed in the fair robes of an idea.[30)]

そして彼は「すべての信念の狭さを不吉なもの」と非難しているが，彼はこの「狭い信念」を欠くが故に死滅するのである．

理知的な，skeptic な人間はその論理を展開するために，是非とも嘲笑すべき現実社会と，その中に住む人間を必要としているのである．従って Isabel 島に唯一人残された時，Decoud には彼の skeptic な論理を展開させるべき現実社会も人間も彼の周囲に見出すことは出来ない．彼が自らの存在を確認するための 外的環境からの 分離から生ずる孤独感は 彼の 皮肉な懐疑主義的な気取りが全く働く余地のない精神的な孤独感へと，動物的な恐怖へと急速に発展していく．人間を，世界を inscrutable な idea, image, passion の連続，混合したものとして 把握している彼にとって idea, image そして passion の見出せない wild nature である Isabel 島における彼の存在は巨大な真空状態の中での存在として彼の目に映っている．彼が関係する世界は社会的因襲性を欠いた世界であり，彼は Isabel 島にあってはあたかも陸に上がった魚のような状態で

ある．社会に反発し人間心理を懐疑することによって自己の存在を確認していた彼は，そうした要素を欠くことによって，wild nature の中に faith は次第に溶け込みその存在を疑い始めたのである．

After three days of waiting for the sight of some human face, Decoud caught himself entertaining a doubt of his own individuality. It had merged into the world of cloud and water, of natural forces and forms of nature.[31)]

Both his intelligence and his passion were swallowed up easily in this great unbroken solitude of waiting without faith.[32)]

彼はこの空虚な自然という生命の綱に彼の全存在をかけて戦っているのである．しかし "The brilliant, Son Decoud' the spoiled darling of the family, the lover of Antonia and journalist of Sulaco, was not fit to grapple with himself single-handed" 孤独な環境の中に取り残された Decoud の悲しみは懐疑主義者の悲しみであり，彼の死に対して Conrad はその理由を次のように述べている．

the trnth was that he died from solitude, the enemy known but to few on this earth, and whom only the simplest of us are fit to withstand.[33)]

しかし Conrad の批評家，Aurom Fleishman は彼の "Conrad's Politics" において，Decoud の死について次のような解釈を下している．

If Decoud, for all his irony, does affirm his identity with the nation and with some large community through his theory and practice of revolution, it is his separation from the revolution and from other man that brings about his suicide.[34)]

この解釈は Decoud の死に対する解釈として非常に unique なものであり，肯首せる論理的根拠をもつものである．

論理的な skepticism は我々が愚行を演ずることから我々を守ってはいるが，逆に社会の中にあって我々が行動することを妨げるものである．Conrad はこの点において，skepticism 以上に "farce-comic" 的な行動により価値を認めているものと思われる．何故なら，Decoud を飲み込んだ Wild nature は，かつて Decoud が存在したことを示す痕跡を何一つとして残しはしないが，彼をなくした Costaguana は彼の monument を建設し，彼を national hero として憶えているのである．society は wild nature とは違って共同生活体に向って働きかける人間に関心を示し，その人間を受け入れる．従って懐疑主義者 Decoud の自殺と，革命に対する彼の積極的な行動は，人間は社会に働きかけてこそ，その存在の価値を有することが出来るということになるだろう．また Decoud の死は秩序と信頼のない nature の世界における人間の精神的限界を示したものでもあるとも言える．

(IV)

"Nostromo" は political novel とか，motive を，dream を取り扱っている小説と種々に批評されている．勿論そうした問題の比重も大きいだろうが，"Nostromo" に流れている思想は Conrad の代表的小説に認められる無常感であると思われる．"farce-comic" な活動と Decoud

の批判する revolution は進歩の為の revolution ではなく，幾度となく裏切りと欺瞞が繰り返された泥沼的社会基盤の上に revolution の名のもとに新しい社会組織と法則が確立し，それを個人的欲望の動機を隠すマスクとしているに過ぎず，混乱した社会の雰囲気の中では virtue は消滅し，腐敗した官僚主義的行為によっておこされる野卑な情熱が，その愚鈍な行動が社会全体を通じて個人の生活に深刻な影響を及ぼすのである．こうした社会の無意味な混乱は，しばしば nature の symbol として使用される海や山と比較されるのである．"The Higuerota" は人間の力の及ばぬ領域に静かに，不変に，汚れを知らずに君臨し，人間同志の相互信頼が崩れ，善なる行為も時間の経過と共に無意味なものとして消え，愚行だけが渦巻く人間世界を見降しているのである．社会が自然と同じく確固たる基盤の上に建設されてこそさらに永続するのである．この基盤とは人間相互の信頼であり，個々人の humauity に基づくものである．しかるに現代の社会にはそうした "the bonds between individuals" が欠けているのである．この bond の欠除が社会的無秩序を生む一原因となっていると Conrad は警告している．すなわち，Conrad は Europe 社会における怠惰で，観念的なものにのみ頼り，社会危機に対して毅然たる態度を取らず，自己欺瞞的解釈のもとに安全な場所へと逃亡する上層階級と，集団の力に頼り，論理的，知的批判力を欠く下層階級との隔絶が社会的荒廃の最大原因であり，その亀裂をぬって武力主義と英雄主義が出現し，ここに文化的社会は野蠻な行為の前に屈服する．そして不条理な事柄が論理的に発展する根拠を持つようになると考えている．従ってこの不条理な世界から人間を救う道は Aristocrat の政治でも，Proletariat の政治でもなく人間相互の信頼と，より高い政治意識であるとして，Conrod は人間の精神的荒廃を社会の荒廃とは同程度には扱わず，人間の humauity により多くの期待をかけているように思われる．彼は現代人を "material interests" の犠牲者と考え，この "material interests" の持つ破壊的，悪魔的要素から人間を救うものは virtue であり love であると語ってはいるが，彼は "Nostromo" において love にすらも救いを見出していない．

"Console yourself, child. Very soon he would have forgotten you for his treasure."

"Senôra, he loved me. He loved me," Giselle whispered, despairingly. "He loved me as no one had ever been loved before."

"I have been loved, too, "Mrs. Gould said in a severe tone.[35]

"I have been loved, too" という言葉は単に Mrs. Gould が彼女自身に実際に起こった事実を述べている以上に，愛する人間の心をも信ずることの出来ぬ苦悩であり，人の心の無常のみならず，歴史の推移，社会の動き，行動の意義，思考の価値，すべてが変化し，無に帰していくことを意味しているのである．このような Conrad の思想は engineer の次の言葉にも現われていると思われる．

"Upon my word, doctor, things seem to be worth nothing by what they are in themselves. I begin to believe that the only thing about them is the spiritual value which everyone discovers in his own form of activity—"[36]

すなわち，この世には絶対的価値を所有するものは存在しないのであって，すべては各人が "may be worth" と思う相対的価値しか所有していないのである．従って人は "how to live"

という問題に答えることは出来ず，個人に適した方法を見出す以外に道はない．ところが，人は "may be worth" という相対的なものを "must be worth" という絶対的なものとして行動する．そしてその行動は倫理的な，あるいは ideal な価値を持っていると信じられている．この "may" を "must" と信ずることが過度な自己確信を生み destructive element を宿す原因となる．この点は Gould が mine に対して ideal な観念を与えて行動した結果が，Sulaco の町に一時的な社会的安定をもたらしただけではなく，Hirsch の拷問にかけられた死体，Sotillo の中にある押えることの出来ぬ egoistic な欲望をかきたて，彼をして人生の，社会の裏切り者としての死，Mrs. Gould と彼の愛の破滅，Nostromo, Decoud の死と，Giselle, Antonia の悲しみ等である．こういう事実を想い返してみる時，我々は我々の感情や論理が本当に正しいかどうかを知るためにはその感情，理論的主張を常に懐疑し，絶対的に信ずることが出来ぬという恐ろしい結果が生まれてくる．そして我々は Decoud の言葉 "What is a conviction? A particular view of our personal advantage either practical or emortional." を決して忘れることは出来なくなる．すなわち Conrad は彼が繰り返して述べている "virtue" にも "bond between the individuals" にも現代社会においては救いを見出すことが出来ないことを知りながら，「物質的利益」を追い求める機械文明を嫌悪し，"virtue", "bond between the individuals" の幻想の中に救いとならない救いを求めているのである．以上の点において "Nostromo" は実に虚無的な小説と言わざるをえない．更にそうした点を強調するために Conrad は "Lord Jim" の中で用いた時間の倒錯を "Nostromo" においても使用している．"Lord Jim" にあっては時間の倒錯は部分的な話しを前後して，語り手 Marlow に語らせることによって積木細工的に話し全体を作り上げる緊張感を，そして口伝えに聞いたと語る Marlow の話しの真実感を高める効果を果しているが，"Nostromo" の場合，時間の倒錯は部分的な話しを前後して提供し，最後に一つの時間的経過を作り上げ，物語りを明確にするといったおもしろさ以上に，物理的時間の経過が決して人間の，社会の進歩を意味することにはならないという点にその重要性が隠されているように思われる．

彼はこうした現代人の人生と社会に深い失望の意を "All this is life, must be life, since it is so much a dream" という一文によって示しているのであるが，我々は Conrad の nihilism は一般的なそれとは違った積極的な諦観，あるいは創造的な諦観を内に宿した nihilism であると思う．

文　　献

1) Joseph Conrad "Nostromo" London : J. M Dent and Sons LTD. 1963, P. 408
2) Ibid., P. 510
3) Ibid., P. 510
4) Ibid., P. 511
5) Ibid., P. 415
6) Ibid., P. 503
7) Ibid., P. 541
8) Ibid., P. 511
9) Ibid., P. 521
10) Joseph Conrad "some reminisense" 東京 大光館書店．日高只一，白石靖注訳「英文名著金集」第八巻，昭和4年，P. 374
11) Joseph Conrad "Nostromo" P. 213
12) Ibid., P. 66
13) Joseph Conrad "Lord Jim" London ; J. M Dent

and Sons LTD. 1961, P. 214
14) Albert J. Guerand "Conrad the novelist" Cambridge, Massachusetts ; Harvard University Press, 1965
15) Joseph Conrad "Nostromo" P. 497
16) Ibid., P. 501
17) Ibid., P. 501
18) Ibid., P. 253
19) Ibid., P. 257
20) Ibid., P. 214～215
21) Ibid., P. 84
22) Aurom Fleishman "Conrad's Politics". Baltimore ; The Johns Hopkins Prers. 1967
23) Joseph Conrad "Nostromo" P. 247
24) Ibid., P. 379
25) Ibid., P. 361
26) Ibid., P. 186～187
27) Ibid., P. 156
28) Ibid., P. 174
29) Ibid., P. 312
30) Ibid., P. 239
31) Ibid., P. 497
32) Ibid., P. 498
33) Ibid., P. 496
34) Aurom Flishman "Conrad's Politics" P. 177～178
35) Joseph Conrad "Nostromo" P. 561
36) Ibid., P. 318

猶, "Conrad" A Collection of Critical Esseys Editad by Marvin Mudrick, "Conrad's Measure of Man" by Paul L. Wiley, そして宮崎孝一著：「コンラッドの小説」からもヒントを得た.